

定禅寺ジャーナル ウェブ版 デイベート編
第五回 「震災と反戦(1)」

2011年8月9日 18:00~19:45

せんだいメディアアテック2F 「3がつ11にち
をわすれないためにセンター」

鈴木 みなさん、こんにちわ。「定禅寺ジャーナル」編集長の鈴木太です。8月から9月にかけて、3回シリーズで「震災と反戦」をやろうと思っています。

8月の初めに、うち(※鈴木さんが仙台定禅寺通りと一番町四丁目商店街の交差するところで販売している『ビッグイシュー』販売店「ハッピー・パニック仙台四号店」のこと)の常連さんであるひとりの男性が亡くなりました。今日は冒頭にそのことを話したいと思います。

亡くなられた男性というのは、サッカー元日本代表・松田直樹さん。彼はうちの常連だったわけです。34歳でした。彼がまだ前橋育英高校で部活動でサッカーをやっているところに知り合い、その後横浜マリノス、今年から松本山雅というJFLのチームに移ってからも、手紙や電話でやり取りしたりしていました。去年、私が『ビッグイシュー』を売り始めたとき手紙を出したらすぐに来てくれるというぐらい、変わったいい奴でした。

単なる常連というだけでなく、今回私が「ひとり災害派遣」そして「汎用災害幕僚小隊」(※いずれも鈴木さんが3月11日の震災直後から個人的に立ち上げ、被災地で行なった緊急支援活動。デイベート編第一回など参照)を結成するにあたって、かなりの支援をしてもらいました。長野県内の大町市というところに東海地方から来る物資の中継場所を設置したのですが、この場所の段取り、輸送手段であるトラックの手配なども全て彼が支援してくれました。ということとで単なる一ファン、単なる友人というだけでなく、今回の震災に関しても「盟友関係」だったと私は考えています。

彼は私が『ビッグイシュー』を買い続けているということとを以前から知っていました(※鈴木さんは『ビッグイシュー』販売員であるというだけでなく、創刊当時からコアなファンで、創刊号を大阪まで買いに行ったという経歴を持つ)。「俺、こんなの読みたくなえよ」なんて言いながら、去年10月から先月まで7回ほどうちの売り場に来てくれました。最初に来た時はいきなり「バックナンバー全部くれ」と言われ、全部買って行ったり。169号までは彼に送っています。うちにとってはなくてはならない常連のひとりだったわけです。

松本からだ本(※『ビッグイシュー』のこと)

を買いに来るというだけで来る。練習の後、「あずさ」で来るか、長野まで出て大宮で乗り換えして新幹線で来るかなんですが、なんでここまでしてくれるのかなという感じでした。自分にとってはその届かないサッカー選手というよりは、だいぶ前から知っている、年がひと回り違う、「仲間」というよりは「なんでしようね」「喧嘩友達」なのかなと。

彼が横浜マリノスをくびになった経緯も、能力があり、しかも個性派で、思ったことをがらん言ってしまうというあたりであって、相手がチームメイトだったり、監督であったり——それは日本代表になっても変わらなかつたわけですが——世界で戦える能力があったというのが自分実感としてあります。

震災でも、わずか数秒の地震で津波が来て、昨日まではピンピンしていた人が亡くなってしまった。彼の場合はいわゆる病気で。ですが突発的なことで、そうしたことが起きて、人間はいつ命がなくなるかわかりません。今まであまり命ということを考えずにただ淡々と生きてきた自分がどうだったのかなと考えています。

今日から3回シリーズでお送りする「震災と反戦」は、まず26年前に私が派遣され、まる一日半ほど現場にいた日航ジャンボ機御巣鷹山墜落の模様について、今まで決して語ったことの

なかったことから始めたいと思います。

私はその時、習志野の第一空挺団の駐屯地の医務室にいまして（※鈴木さんは当時自衛官だった）、お盆で翌日8月13日には山形の実家に帰って成人式に出席する予定でした。というのは、私が生まれた山形県寒河江市というのは、夏に成人式をするのです。⇒シャツを着てやるので正直あまり帰りたくはなかったんですけども、久しぶりの帰郷ということで、心うきうきしていたところでした。

5時で勤務が終わったんですが、医務室の横で同僚と「明日の朝、何時頃行く？」などとタバコを吸いながら話をしていました。確か6時前だったと思うんですが、急にエマーゼンシーコールが鳴りました。駐屯地全体にサイレンが鳴ったんです。自分が習志野駐屯地にいた時、唯一聞いたエマーゼンシーコールでした。第一報というのは、日航ジャンボ機ではなく、30人から50人乗りの小型から中型の飛行機が消息を絶ったという情報でした。こうした災害派遣の場合、基本的に2倍換算でいきます。最大50なので、その2倍の百人分の医療物資や毛布とヘリコプターに積み込んで待機しました。

実は待機したメンバーというのは正規のメンバーではありませんでした。お盆で、本来こうし

た任務に就くべき人間の多くが休暇をとっていたのです。まさかこういうことが起こるとは思ってもおらず、私たちも正直、そこまでの教育を受けているわけではなかったのです。20人召集されましたが、ほとんどが医療経験がない人間でした。衛生部隊だったのは私ともうひとり、いっしょにタバコを吸っていた男だけで、残り18人は医療経験はありません。墜落したのが日航ジャンボ機だとわかったのがそれから8時間後くらい。朝方でした。実際に第一陣としてヘリで向かったのは事故翌日未明ということになります。

これは自衛隊からではなく、米軍からの情報で、米軍の横田基地のレーダーが長野県と群馬県の県境にある御巢鷹山に墜落したのをキャッチしたというものでした。完全に墜落したのかどうかもわからないまま私たちは行ったわけです。8時間かかった理由の中に、長野県知事と群馬県知事が：普通はこういう時には県知事側から自衛隊に出勤要請が出ます。今はちよつと違うんですが、当時はそういうやり方でないという自衛隊は出れないという事情がありました。どっちの県境なのかわからないということで、群馬県知事と長野県知事が押し合いへし合いになったそうです——これも後からわかったのですが、もしそういうおかしな現場の擦り付け合いがなけ

れば、もしかしたら4人しか助からないということではなかったかもしれません。私が行った時は、まだけっこうな人数の人の息があった状態でしたので、もしかしたらもっと簡単に多くの人数が助かったんじゃないかと思っています。実際に現場に行き、ヘリで降下しようとしたんですが、着陸できません。着陸できるような場所がなく、真っ暗な上に、まだ燃えているわけですから。まだ燃えているんですよ、8時間以上たっても。噴煙から何からで下に下りるにも熱い状態でした。気圧の関係なのかわからないのですが、ホバーをしているのものすごく揺れました。これが非常に怖くて、誰も正直言っ

て第一陣で行きたがりませんでした。私はもうひとりとはぼ唯一に近い医療関係の間だったので、「じゃあ俺が行くわ」ということで落ちたんです。落ちたところは遺体の山でした。

あの時の感触というのは、表現しようもないし、26年たった今でも忘れることができません。私の PTSD の要因になっています。しかし PTSD の私から言わせてもらおうと、それを忘れなかったおかげで、今回の震災では、ひとが動けない中で動くことができたのかなという感じがします。だから無駄ではなかったと思いますけれど、当時の私はまだ二十歳です。高校を卒

業して2年なにがししかたっておらず、経験がほとんどありません。今でしたら、おんなじシチュエーションでもほぼまごつくことなくやれると思います。ところがその当時の自分というのはビビリ屋なんというのを通り越すようなものでした。そこに落ちてから、しばらく記憶がないですよ。一時的に気が狂ったのか。よくわからないくらいおかしくなっちゃって、後で見たらおしっこもらすくらいおかしくなっていました。いっしょにいた人間からぶん殴られるか何かして我に返り、それから行動したんですが、遺体の山というだけでなく、息のある人が次々に自分たちが見ている中で息を引き取っていききました。

今回の震災は、自分の中でショックな部分もありましたけれども、それとは比べものにならないくらい衝撃的な経験でした。何がかと言えば、死んでいく人たちに対して自分は命を助けることができないくらい未熟だったわけです。それを未だ自分の中で悔やんでいるところがあります。いろいろな人からいつまでも考えなくないんじゃないかと言われてきました。でもその人たちはそういうことになったことがないからそういうことを言えるんです。もしその人たちもおんなじことになったら自分とおんなじことを考えるんじゃないかと思えます。

だから今回も震災を受けて、何にもできないでバターンとなっちゃってる人たちに対して、私「がんばって下さい」なんて言えないです。なぜかと言ったら私もそれから何年も仕事なんて何をやったか全然わからないです。一番未熟だった時期にそうしたダメージを受けてしまったので、それから淡々と自衛隊の業務を何年かやりましたけれど、本当にその仕事をやり切ったかと言えばやり切れなかったと思います。

これは『定禅寺ジャーナル』の中でも書いたんですが、こういう方がいました。両手両脚と首がなくなっちゃって、胴体だけ見つかった方なんです。その人のジャケットの内ポケットの中に、おそらく墜落途中で書いた遺書がありました。家族4人いたんですが、4人それぞれに書いてるんですね。その中で奥さんに対して「おまえといっしょになってすごくいい人生だった」とか書いていて、人ってこんなに極限状態でも：愛つてすごいなと思うと同時に、そうした愛し合っているふたりを自分が引き裂いたんじゃないかと——今はそうは思わないんですけど、当時はそう思いました。

藤岡市というところで合同慰霊祭が行われたんですが、その際に遺族の方からお礼を言われました。ですけど、お礼を言われるまでのことを私はしてないと思うんですね。手紙が出ただ

けでもよかったんじゃないかと言うんですけども、もしかしたら到着が早かったら亡くなることはなかったのかなと。首もなかったくらいだからそんなことはないんだけど：けどもつとやりようがあったんじゃないかという風に考えまして。それでずーっと悩んでしまっ、それが看護師の資格を持っているにも関わらず、職業として看護師をできない理由のひとつになっています。

去年7月に仙台に来てからホームレスになったわけですけど、どんなにめちゃくちゃなことになったとしても、いやしいことだけはこの人たちのためにできないなというのが自分の中にあります。自分の中ではホームレスになつたくらいで何やって感じてしかなかったんです。

これは日本全体もそうですし、仙台のホームレスにも言いたいことがあるんですけれども、確かに百人には百人それぞれの事情があります。これは私もわかります。ですけど、その事情って、何をやれば解決できるのか。ひとりだけでやればいいのか。私もそうでしたけれど、ひとりだけでなんて無理です。確かに『ビッグイシュー』はひとりですべて売ってというのがありますけれど、買う人がいなければやっていけないんです。ひとりで問題を解決することは難しいんです。何か事情があるんなら、

人に話せばいいですよ。それができずにいつまでも「ひとり上手」でいるんですか。そんなことしてたら、ホームレスってどんどん増えるだけです。今回、倍ぐらいに増えていますから。

正直言うと一番簡単なのは、「もう使いもんにならないから」って勾当台公園に並べて全部機関銃で撃っちゃえばいいんです。だってやる気がないんですもん。俺が仙台市長だったらそれくらいのことやる。けどそんなことをやるわけはないわけだから、自分で本当にこういうのをやりたいというのならもがけばいいんです。やる方法がないって言う人もいます。けど、そんなことないです。だって『ビッグイシュー』売ってるの仙台で3人しかいないんですよ。そのうち2人は、私を含めて生活保護者です。ということとはホームレスはたったひとりしかないんですよ。どういうことですかね。

これは『ビッグイシュー』を売る売らないとかそういうことだけでなく——支援団体というのはほとんど『ビッグイシュー』にからんできます。その支援団体が実は邪魔しているということにつながっていると思います。実際、私が『ビッグイシュー』をやる時、支援団体から邪魔されました。この場では名前出しませんが、支援

支援団体が震災の時にいろんなかたちで支援に出た時に、ああこれは第二のホームレスがじゃ

んじゃん出て来るんじゃないかなと思ったんですが、実際そういう風になりつつあります。これは非常に問題だと思います。これは『ビッグイシュー』も含めて考えなきゃいけない問題だと思います。

3月下旬頃、「汎用災害派遣幕僚小隊」の全体活動が終結する夕方だったんですが、仙台市若林区のある浜の方に私たち全員で行きました。そこで瓦礫の山を見て思ったことがあります。この瓦礫の山を単なる瓦礫の山にしちゃだめだ。今回の震災かもしれないけれども、もしかしたら戦争によって起こされる瓦礫の山になるかもしれない。うちの代が戦争を起こさせないために一体どういうことがやれるのか。つまり、こういうものを生きた教材として使っていくことが、今から生まれて来る、震災を経験していない人間に対する警鐘なのかなと。

一般の方で誤解されている方がいらつしやると思いますので私の方で補足しますが、自衛官とこのおそらく一般の人たちよりも反戦、つまり戦争をやっちゃだめだと思っている人間が多い。なぜかと言いますと、自衛隊ではいろんな武器を使って実践演習、実践射撃などをやります。小銃ひとつでもここにいてすべての人間を殺傷できます。だとすると、今回のように原発あるいは核ということになると、宮城・岩手・

福島あたりが一瞬にして生物が住まなくなっちゃうくらいダメージを与えることが可能なんです。昭和20年の8月6日と9日に広島と長崎に投下された当時の原爆よりも、今は数千倍数万倍の威力を持った兵器があるという事実も忘れてはならないと思います。兵器というのは別に今回は自然災害ですが、それで済んでいればいいんですが、その後に出て来ている人災のようなものは戦争のようなものに思えてならない。

御巢鷹の事故もそうですけれど、戦争と震災とということに関しておふたりからお話をお聞きしたいと思います。太田さんからどうぞ。

太田 私には戦争を全く体験していないし、御巢鷹の事故に関しても当時まだ5歳にもなっていないので、話として聞いたことしかない。今回の震災に関しても仙台の中心部にいたせいで悲惨な現場というのはほとんど見ずに——一週間後にちよつと見に行つたぐらい——なので自分の中でも生き生きとした状況としては把握できてない。

鈴木 門脇さんはどうですか。

門脇 「震災と戦災」あるいは「震災と反戦」というテーマに関して8月にこういう特集を組もうという話になったのは、確か6月ぐらいでしたよね。その時に鈴木さんから、毎年8月に『ピ

『グレイシユール』で戦争特集をやっているんだと紹介されました。例えばこちら2007年はアンジェリーナ・ジョリーの表紙で「平和省をつくる」、2009年はジョニー・デップの表紙で「戦争を終わらせる」、そしてその間の年2008年は戸田恵子さんの表紙で「戦争を知らない大人たちへ」…。

鈴木 実は私、この戸田恵子さんの表紙の号から『ビッグイシュー』の販売員を始めたんですよ。それで自分にとっては因縁じみたというか：一年前の8月12日、御巢鷹の事故当日なんです。その前の日からやれる予定だったんですが、モノを持って来る人が来なかったんです。それで結局1日のびてしまった。だから自分の中では偶然とは言えない感じがします。今でも8月はほとんど寝れません。今月に入ってから9日たちますけれど、3時間くらいしか寝ません。夢に出て来るなんて夢じゃないんですよ。幽霊や亡霊が自分に対して出て来るんだとしても、彼らは持って行きようがないんですよ。それは26年たってしまったからどうだというわけでもないし：自分の中では26年というのはまだ短いんです。一方で、『ビッグイシュー』始めてようやく一年ですけれど、すごく長くやている感じがします。10年くらいやっているような気がします。短いのに長く感じ、長

いのに短く感じるその感覚が自分の中でよくわからない。からない。

門脇 いろんなことがあったということですね。鈴木さんが言われたように、今回の震災と戦争とをつなぐひとつの大きな点としては、なぜ自分生き残ってあの人は死んでしまったのだろうというように、命を分けたものがほんのちよつとした偶然であったり、あるいは一瞬にしてこんなにも多くの人の命やこれまで一生懸命積み上げてきたものが失われてしまったりという人と比べることのできないいわば「絶対的な」体験においてですね。

鈴木 例えば気仙沼ではなぜあれだけ津波で死者が出たかという点、去年の11月の地震に要因があると考えています。津波警報が出たのですが、ハザードマップに従って避難した人は56%しかいなかったんだそうです。今回も家の中で「あ、来た」と思っているうちに亡くなった方が相当いるんじゃないかなと感じています。自然災害って、待ったなしなんです。だからだいたいこれくらいでいいだろうというの——普通の日常生活の中では失敗したということがあっても命をとられるようなことはないんだけど——浜に住んでいるんだということとをその人たちはたぶん忘れていたんじゃないかな。水というのは人間とは切り離せないも

のではありますけれども、同時に水が大量にあつたら人間ていつまでも泳げるわけじゃないから溺れるわけです。火なんかもそうですよね。火もうまく使えばこれほどいいものもないけれど、自分に燃え移ったら焼け死にますから。

門脇 7月29日に仙台・長町にオープンした「アート・インクルージョン」というバリアフリーなアートプロジェクトのプロジェクトスペースで「復興支援アートミーティング」というのが行われました（主催：アート・アンド・パブリック協会、アート・インクルージョン実行委員会、一般社団法人MMIX Lab）。その中で気仙沼のリアス・アーク美術館の山内主任学芸員が、非常に印象的なお話をされました。その話の中心は「記憶」です。山内さんは「津波学者」でもあって、津波の研究もされているのですが、ここに家を建ててはいけなとか、どういふところに住むべきなのかといった、今回行われているとおなじような議論が、実は昭和8年の時点で行われていたというんですね。また、当時写真がそこまで一般的ではなかったのに、今の我々が見ても津波の恐ろしさが強烈に伝わって来る津波画というのが描かれ、今でいう週刊誌のグラビアのようなかたちで津波の恐ろしさを伝えていきます。しかしそうした記憶は残念ながら失われてしまっていた。想定外想定

外と言われますけれど、実は今回の津波も想定内のことであり、記憶の伝達がうまくいっていなかったということがわかってきた。そうした記憶がうまく継承されなかった原因は、戦争の影響によるものかもしれないけれども、もしかしたらみんなの「忘れない」という気持ちがあるからではないか、というお話です。これは戦争体験ともつながることだと思えます。また、日航ジャンボ機など安全管理ということにもつながることです。そうした悲惨な出来事を忘れないという欲求の中で風化していく。それを思い出させるのが8月であり、鈴木さんを眠らせない天使たちなのかなと。忘れちゃいけないんだぞと鈴木さんを起こしに来るわけですよ。

鈴木 勘弁してほしいですよ、ホントに。去年は『ビッグイシュー』をやり始めて間もなかったというのもあるので、寝る間も惜しんでやっていた部分があったんです。だから寝なくても苦痛にならなかったんです。だから今年はいへんだろかなとある程度予想してましたけれど、先月途中から原稿を全く書けなくなりまして。ほとんど寝れなくて、医者から眠剤もらっても寝れないんですよ。下手すりゃ殺されても死なないんじゃないかなというぐらい寝かせてもらってない。

太田 忘れないということでは失われた部分というのにはあったと思うんですけど、鈴木さんのように忘れられないがために苦しむという部分もあるのかなと。トレードオフと言ったら変ですけど、忘れることで後々苦労することはあるけれど、忘れられないことで生きていることが辛くなってしまったら、それもどうなのかなと。何かが起こった時に、本当に忘れちゃいけない部分ともう忘れてもいい部分とをきちんと分けることが大事なのかなと思いました。

門脇 気仙沼リアス・アーク美術館の山内さんのお話でもうひとつ非常に面白かったのは、「もう今さらリアルな記録はいらんじやないか」ということでしたね。絵とか話でいいんじゃないかと。それもリアルな話じゃなくて、寓話的な話でもいいんじゃないか。それ自体がPTSDを引き起こしてしまうようなメディアではない方法、それが例えばアートに求められているんじゃないかと。

鈴木 御巢鷹で、自分たちが遺体の片付けなどをしているところに『フライデー』が来まして。ところが彼らはこんな写真は撮っちゃ駄目だとカメラをぶん投げてうちの手伝いをし始めたんですよ。PTSDという概念なんて当時なかったし、『フォーカス』と『フライデー』で覇権争いみたいなことをやっていたんですけど、今の

メディアと違うなと思うのは、こんな撮ってられない、もしかしたら生きてる人がいるかもしれないと「何やったらいいですか。手伝わしてください」と来たところなんです。それで川上慶子さんを見つけることができました。彼女はその後看護師になったんですけど、彼女の気持ちもわかるし：そういうことになっちゃったから自分は看護師になれないという気持ちをわかってくださいとは言いやうもないんですけども、私は無理です。

門脇 いろんな選択があるでしょう。その報道者たちの選択というの、迫られた結果のものですね。1994年にスーダンに取材したケビン・カーター氏の、アフリカの子どもがしゃがみこんでいるのをハゲタカがすぐ後ろでねらっている写真「ハゲタカと少女」がピューリッツァ賞を受賞しましたが、その後なぜ助けなかったんだとさんざん言われ、写真を撮ったカーター氏は自殺してしまいましたね。

太田 あの写真があったおかげでその状況自体が有名になったということはあるんですけどね。門脇 その体験によって看護師になった人がいる一方、看護師はできないという人がいる。そこに興味があります。

鈴木 これは初めて言うんですけど、百何人の命を自分が奪ってるんだと今でも思い続けて

いる部分があるんですよ。昔で言えば打ち首獄門。今すぐ死刑だと言われたって文句言えないと思ってます。これまでいろんな人にいろいろ言われて来ましたが、自分の中でそういう風になっちゃってるから変えようがないんですよ。医療の現場にいます、非日常の考え方が日常化して来てしまっていて、たぶん気が狂うと思います。だからできないと思います。

門脇 記憶というところで言うと、ここに「軍国酒場」というお習字をこどもに書いてもらっています。これは鹿児島市の繁華街・天文館にある店の名前です。今、ツイッターをチェックしたところ、この店に昨年いっしょに乗り込んだ横浜のアーティスト アート・ラボ・オーバさんも今この中継を見てくれているようです。天文館アーケードをちよつと入ったところにあるのですが、名前だけ聞くと怖い感じがしますし、見た目にもすさんだ感じのお店です。4階建てくらいのビルの最上階にあるんですが、このお店以外は全部空きテナントの廃墟ビルで、一階入り口からずっと「農民を救え！」とかものものしいスローガンの書かれた階段をのぼっていると、上階に行くにしたがって戦艦の絵が描いてあったり、スローガンがエスカレートしていったりします。そうしてたどりついた最上階の店の雰囲気は——途中もそうですが——お化け屋

敷そのもの。あそこまでリアルにすさんでいなければテーマパーク的な何かかと思うようなありなさです。中におそるおそる踏み込んで行くと突然ブービートラップよろしくブザーがけたたましく鳴り、店の中に入らないと鳴り止まない。店内に入ると本物っぽい機関銃やヘルメット。天井には鉄条網がはりめぐらされ、壁には所狭しと戦時中の記事や特攻隊の写真などが貼られています。やけに髪の毛とした自称70代のママがいて、こどもの頃に東京からこちらに疎開して来たそうです。話をお聞きすると、かつては非常ににぎわっていたと言うんですね。どんな方々にぎわっていたかというところ、太平洋戦争に行かれたかつての兵隊さんたちでにぎわっていたと。いろいろと凝っていて、席にガダルカナルとか名前がつけられていたり、つまみはゆで卵と乾パンなんです。最後に残すと「慰安袋」とプリントされたビニールに入れて持たせてくれます。ところがかつて戦争に行かれた方はほとんど年をとって死んでいってしまうので、今はほぼ誰も来ない。代わって30代くらいの子が来てるんですね。それはおじいちゃんや戦争に行った世代で、軍歌に興味があつて歌いに来るらしいんです。

先ほど鈴木さんから PTSD という言葉も最近になつて一般化してきたというお話でしたが、第

二次大戦に行った方は、じゃあ PTSD にならなかったかと言えば、問題化されなかっただけで実際には大量になっているわけですよね。

鈴木 そうです。

門脇 ではその人たちは一体どこで立ち直ったというか：だって戦争に行った人たちが高度成長を支えたわけですよね。その彼らはいったいどこで癒えたのかといえば、ひとつは猛烈に働くこと、日本を立て直すという使命に動員されることで癒えて行ったのかもしれないですけど、その一方で実は夜な夜なこの「軍国酒場」のようなところに集い、家族には言えないようなことを話すことによって癒えて行ったのかもしれない。「軍国酒場」と名前だけ聞くとものものしいですけど、決して「軍国主義酒場」ではないんですね。軍国主義の時代の方がことも悪かったことも含めて共有することで癒される場、これが「軍国酒場」的な場で、それが日本の至るところにあったのではないかと。ところが今、そこには実際の記憶を伝える人はおらず、機関銃や鉄条網や特攻隊の写真などいわず、「かたち」だけが抜け殻のように残っている、というのが非常に象徴的な気がしました。

鈴木 軍人のこともそうですが、今回の震災の支援に動いた自衛隊の中で、最低1万人がおかしくなっているそうです。実際に現役(自衛官)

から聞きましたら、1万人どころじゃないと。二人に一人くらいの割合で頭がおかしくなりかかっているという話を聞いています。どの支援の時に公務員は言うんですけれど、「寝食忘れて」という言い方しますよね。あれ、絶対だめなんですよ。どんなに言われようが、公務員は8時から5時という感じで、もし時間がのびるんだったらシフトを変えて違う人間を持って来るといふようなことをしていかないと。通常の任務とは違うんですよ。自衛官と言ったって、別に遺体を年中触りなれているわけじゃないし、あの臭いなんて我慢できるわけじゃないですよ。だから仕事なんですよ。ただ制服着て、ただ自衛隊員というだけなんです。自分は特殊な訓練を受けていますけど、そうじゃない人が大部分なんです。だからおかしくならないわけがないんです。

今回「汎用災害幕僚小隊」をやった時に、現役自衛官に提言しようと防衛省向けに要望書を出しました。中隊が駐屯しているところに必ず何人かのカウンセラーを置くか、時間を軽減させるような方策をとらないととんでもないことになるというところを出したんです。

太平洋戦争も結局、戦争をやったことのないようなトップの連中が突っ走ってしまっただけでしょう。それと同じように、やったこともないよう

な連中が机上の空論で大丈夫ですと言って指揮を執って大丈夫じゃなかったんですよ。これまで出たこともなかったような予備自衛官とかを出して、それでもまだ足りなかった。足りないわけじゃないんですよ。最低1万人ですよ。それどころか半分くらいはおかしくなっているって言うんだから……。

門脇 ツイッターでも自衛官のつぶやきが散見され、ものすごい数のフォロワーがついたりしていましたね。家族に「あまりがんばらないですよ」と言われたので「今がんばらないでどうするんだ」とこたえて現場へ行ったとか。

鈴木 ツイッターなんてそのうち統制されて何かなりですよ、間違いなく。

門脇 自主規制なのかその方はつぶやきを削除してましたが。

鈴木 今、ツイッターなんていってみんなやってるけど、俺はつきり言って馬鹿だと思えますよ、ツイッターやる人間なんて。だって自ら望んで国に対して自分はどういうことやってるのを暴露しているみたいなものですよ。そんなの怖いじゃないですか。パソコンの機能の中に国家の怪しい考えが入っているとしたらと、みんなは考えないかもしれないけど、俺は考えるんですよ。なぜかと言ったらそういう教育を受けて来ているからです。

太田 そういう教育というのは？

鈴木 富士学校でそういう教育を受けて来たんですよ。日本唯一の殺人教科書があり、スパイ養成機関でもある富士学校です。昔の731部隊みたいなもんですよ。

望んでいなくてもおかしな意味での文民統制がなされてしまうんじゃないかなと。これはある意味プロパガンダ以上に怖いんです。プロパガンダというのは政府あたりから仕掛けるわけですが、ツイッターというのは仕掛ける前に国民の側から「私こんなのやってます」って言うてるわけですよ。

門脇 なるほど、そのつぶやきが草の根プロパガンダになっていると。

鈴木 (首をかしげる)
太田 プライベートを触らせているということに関して危機感があるということですか。

鈴木 それもあるし、住民全部に通し番号をつけようという発想に似てるんですよ、ツイッターって。発想を通り越して、昔の特高警察に近いかどうか。人はいないんだけどパソコンをもって監視できるというか。衛星放送や衛星電話回線につかっている衛星がありますよね。軍事衛星に転用されているやつもあるんですよ。携帯とかパソコンとかの情報みんなそっちの方にいつちやってるんですよ。

門脇 監視されていると。

鈴木 流出とかどうのこうのというのは当たり前なんです。俺が携帯はあんなのしか持たず、パソコンを持たない理由はそれです。自分で自分の情報を努めて垂れ流しするほど馬鹿じゃないですもん。極論するとパソコン持つて人間なんてみんな馬鹿ですよ、俺から言わせると。こんな危ないことないですもん。秘密があるよ

うで秘密なんてないとおなじです。
太田 逆にそんなに秘密を守ることがそんなにメリットなのかよくわからないです。正直まだ話について行けてないんですね。

鈴木 ついて行けてなくても今の時点ではいいです。今日はかなり過激な話を出してるし、今すぐ理解してもらおうとも考えてないです。なぜ俺がこんなこと言うかと言うと、反戦じゃなく、今戦争に突き進んでいるように見えるんです。太平洋戦争というだけでなく、今の状況がサラエボや旧ソ連の状態に似ていると以前言いましたが、それよりも今の状況がはるかによくないと思います。だんだんみんなが無関心になっ

太田 中高生の時にはあまり政治に関心がなかったんですね。大学生の頃のほとんどなかった

と言っていていいですけど。ツイッターに関して言うと、これを使っていることによって政治に関する話とかが流れて来るようになった。それによって政治、経済あるいは現在起こっているいろんなことに興味を持つことにつながっているんですね。だから必ずしも無関心になっ

ていくわけではないです。逆に関心が芽生えるきっかけにもなると思います。情報垂れ流しの危険性というのは、いろんな人が自分が犯罪とかやっちゃったやつを言って騒ぎになりま

したけれど、それはもともと悪いことをやってのがいけないんであって、そこに自覚があつて問題ないことをやっている分には問題がないんじゃないのかなということを思います。

鈴木 これ以上は危ないから言わないんだけど、電子・電波に関して、一般の人はあまりにも無防備過ぎる。これは俺からの警鐘です。これ以上はちよつと言えませんが。電気製品もそうだし、新しくできてきたものっていうのは、自分は疑ってかかるんですよ。なんかの意図があつて生み出されたんじゃないかと。その中でこれは危ないから俺は絶対さわりたくない筆頭は携帯、パソコンです。携帯はしようがないから持つてるんだけど、これはネットもできないし受け専

門です。

門脇 最近まで持つてませんでしたしね。

鈴木 だって怖いですもん。

門脇 鈴木さんにものを渡したい時、非常に困った記憶があります。この「定禅寺ジャーナルウェブ版」のチラシが刷り上って一刻も早く渡したいと、定禅寺通りの売り場の植え込みに封筒に入れて「鈴木さんへ」と置いておいたところ、結局誰かに持つていかれてしまいました。情報操作、流出に関する映画とかも多いですね。

鈴木 芸能人と政治家と軍国家には共通するものがあるんです。今日はあえて答えは言いません。次回まで考えてください。

門脇 情報操作がうまそうですね。

鈴木 第二次大戦の前もそうでしたし、世界的にそうなんです。芸能人というのは、今テレビで出ていてどうというだけでなく、いろんなかたちで…。

太田 情報共有というお話ですよ、ツイッターなり発信というのは。過去にあった津波の話とか、あるいは今回の震災の話とか、ひとりか黙っていたらその人しか知らない情報がほとんどだったはずなんです。その人しか知らなかったせいで後々伝えられることもなく忘れられてしまった部分が過去にはあつたはずなんです。それをその人が今回いろんなツールを使っ

て発信したことで多くの人の知るところになって、直近の部分でも対策がとられたり、あるいは将来に向かってそれを蓄積していくことも可能にはなるんじゃないかと思うんですけど。

鈴木 そういうメリットはあるかもしれないけど、それ以上に相当のデメリットがあると思う。

門脇 今日冒頭、鈴木さんのお話にあった松田直樹さんは松本のサッカーチームの方でしたけれど、3年ほど前に松本にある信州大学人文学部コミュニケーション学科の学生さんたちといっしょにまちの中でアートをする「松本オムニバス」という企画をやる機会がありました。4チームくらいに分かれて、私は安原町というかつての商店街で企画をやったんですが、別のチームはパフォーマンス集団で「キャシー」という女性3人組を呼んで、パフォーマンスをやったんですね。黒いストッキングをかぶっていて、顔は見せない。かつて養蚕が盛んだったこともあり、今も女性の下着工場があるのですが、その前庭でボレロをかけながら、観客をひとりひとり捕まえていくというパフォーマンスでした。捕まえた観客には声はいっさい出さずにジェスチャーでこういう動作をしろと指示するんです。すると捕まった子は笑いながら言われた通りまねしちゃうんですよ。そしてどんどん同じ動作をする子たちが増えていく。それはおそらくキ

ヤシーの「奴隷」なんです。たぶん、あの場で捕まって、言われるままにあの動作をみんなやっていたあの子たちにはそうした自覚は全くなかったと思います。そういうことを鈴木さんはツイッターに感じているんじゃないですか。太田 ちょっとつかめなかったんですが。

門脇 みんな笑顔でやっちゃうんですよ、キャシーがやれと身振りで指示することを。反対できないというか、みんなとおなじことをしないと居心地が悪い状況なんです。

太田 無防備に乗せられちゃうということですか。門脇 「僕はその踊りやりたくないんだよ」とは言い出しにくいというか、そんな人はひとりもいなかったんですよ。半分照れながらやっちゃうんです。それを参加型の楽しいパフォーマンスと受け取った人もいたかもしれませんが、ああやって戦争に連れて行かれるんじゃないか、加担させられるともなしに加担させられているんじゃないかと空恐ろしさを感じた人も多かったと思います。キャシーに連れて行かれたのはほぼ大学生で、観客はもちろんおじさんお婆さんもいたわけですが、そのあたりは計算されつくしたパフォーマンスだったんだと思います。鈴木さんからすると、ネットの世界はそんな風に見えるんじゃないでしょうか。

鈴木 情報はいろいろなところから入れること

ができるようになっているんだけど、情報操作されたらどうなりますか。今まで以上に簡単なですよ、情報操作なんて。何にもなかった時の方が情報操作って難しかったんですよ。今、簡単なんです。ちよこちよこことこんな触るだけでできるんです。これがいいものか悪いものかって、判断できなくなってきたんです。

太田 判断力は鈍っていると思います。

鈴木 黒人に対してコカ・コーラを飲ませておかしくさせていった経緯とパソコンや携帯はすごく似ているんです。地下鉄の中なんか見ると本当に馬鹿しかいませんよ。携帯ばかりさわって。一日3時間以上携帯触っている奴らなんかみんなぶち殺してやりたいです。あんなのに金かけるんだつたらもつと金をかけるべきものは他にいっぱいあるんですよ。だって昔はなくてよかつたんだから。「今はないと駄目なんです」なんて、そんなことないです。時代が変わったとか言いますが、時代なんか変わってないです。明治維新からほとんど変わってません。変わってかなくなったから結局太平洋戦争を起こしたんですよ。

門脇 確かにメディアの巧妙さというのはありますね。でも情報がない時にはない時、ある時はある時でうまく情報に乗せられてきたしで、それを教育、今の言葉で言えばメディアリテラ

シーというようなことで、いちごっこの的に繰り返して来ているんじゃないでしょうか。震災の記憶という場合、それをなくさせることに利害がある人はあまりいないわけですけど、戦争の記憶をなくすということに利害はあつて、操作は行われているでしょうね。

太田 戦争って結局、国対国なんですか。民族対民族というのもあるんでしょうけれど。あるグループ、集団になった時に判断力が鈍っているように思うんですよ。本来やらなくてもいいようなことをやってしまうような。集団心理とどうか。

鈴木 アニメですけど、『新世紀エヴァンゲリオン』というのがありまして、使徒という存在と戦っていたはずなのに、最終的には人間対人間になっちゃって、しかも同じ国連の機関であるはずのもの同士なのに殺し合いになっちゃうんですよ。結局、みんななくなっちゃうんですけど。戦争って、そういうものなんですよ。つまり、善とか悪というのは存在しなくて、生か死かなんですよ。

門脇 「こちら側」か「あちら側」かに分けるということですよ。

太田 本来そこは分かれるものではなかったよなものですら、分かれているようなつもりになっちゃいます。

鈴木 ただ国ということに関してもユーゴスラビアの内線の例があるじゃないですか。親戚同士だった、兄弟同士だったというのにドンパチやっちゃったでしょう。その感覚がたぶん日本人にはわからないんですよ。わからないんだけど、日本人だってこのままおかしくなっていったらそうなっちゃうかもしれない。

門脇 それを震災に引きつけて言うと、「がんばろう」キャンペーンなんかもそうかもしれませぬ。

太田 「がんばろう」と言っている人とはそれに乗らざるがなんばっていない人に対する卑下というのがどこかにあるのかなと思います。門脇 以前、鈴木さんから「がんばろうが死ねに聞こえる」という小学生に避難所で出会ったという報告がありました。私もそれをきっかけに「がんばろう」をリサーチしてみようと思ひ——もうちょっと早くからやっていたらよかったんですけど——先週末くらいから始めたんです。ピークはもう過ぎていると思うんですが。

鈴木 ピークはそうですね。

門脇 ピーク時というのは5から6月くらいで、それこそ普通の民家ですら「がんばろう」と貼り出しかねない感じだったんですが、今現在残っている「がんばろう」はパチンコ店やスーパ

ーなど大手資本のところですね。もうひとつは町内会ぐるみでやっているもので、例えば仙台の大町・立町辺りですと「みんな元気でがんばりましょう」というのが配られ、貼り出している。あるいは国分町でも同じフラッグが街灯や街頭にはためている。あとは個人商店とか。

太田 運送関係のトラックとか。
門脇 そうですね。タクシーとかも貼ってますね。逆に言うとそれがどこにまだ残っているのは、企業ぐるみであったり、ある団体の内部であったりする「がんばろう」なんです。企業のCRSとして信用度を高めたり、好感度を高めたたりするためにやっている。大資本でやっているところは旗とかポスターとかいっぱい作っちゃうんだと思うんですが、「残っちゃってる」というか、色が褪せてるんですよ。それがなんとも象徴的なんですけれども。パチンコ店なんかは日頃から士気高揚的な道具立てを行なっているわけで、そんな中で「がんばろう」を使っているのかなど。その場合、被災地に向けて「がんばろう」と言っているのではないんじゃないか。自分たちの企業、自分たちのチームという枠があつて、その結束力を高めたり、その集団の価値を高めるためにやっているように見える。
太田 誰かに向けて「がんばろう」と言っているよりは、「がんばろう」と言うことが目的にな

っている。

鈴木 そうそう。だから便所の中でそれを言ってももらえれば一番いいと思う。ウザイから。いいかげんにしてほしい。

門脇 それが目的なので、例えば個人でやっていた人などはもう恥ずかしくて取り外しているわけですね。残っているとこは企業がメインになっている。でも企業に勤めている方が「これ嫌なだけだ」と思ってもなかなか…。

太田 やりにくいってことですか。

門脇 「やめましょうよ、社長」というのもひとつの意見として、誰も言わないなら面白いのかもしれないけど…。

鈴木 政治献金規制法というのがありまして、企業の団体献金が禁止されていますよね。献金は駄目だけれど、こういうことをやって言うこと聞けというのがあるのかもしれないし。それがプロパガンダをうまくやらせているのかなと。そこに金が絡まなくてもいいんですよ。こういう便宜をはかるからということをトップに話したらその通りになっちゃったりとか。お金じゃないけど実質的にはインサイダー取引みたいな感じになっちゃってる部分があるのかもしれないとか。大企業とかって、本当に信用できないので。

門脇 自分に必要な人がまだ「がんばろう」と

言っているんだと思うんですね。今度選挙があるじゃないですか。だから選挙事務所の前には「がんばろう」ですよ。こちらは真新しいやつが。そういう風にして内と外ができていくんじゃないでしょうか、この「がんばろう」に見られるように。

鈴木 民主党のおじちゃんたち、おばちゃんたち、今回相当ぶち落ちるからたぶんそのためのあれだと思えます。俺のところにも何人か来ましたよ。入れてくれとって。あんまり言うとな全部書くからなと脅したら誰も来なくなりました。まあこれは半分冗談ですけど。議員さんたちにしても、すごくやってる人はやってるんですよ。ただし、やってる人は目立たないようにやってるんです。やっけない人は目立ちまくって、その時だけというのが多くて。本当に名前全部暴露してやるのかな。あんまりひどかったら『定禅寺ジャーナル』で実名だしますから。そんな腐れ議員なんて当選させたくないんで。

門脇 反戦やその反対の戦意高揚に関しても、この「がんばろう」と同じシステムで動いているんじゃないでしょうか。

鈴木 基本的にはおんなじだと思います。

門脇 ある団体でこういうことを決めました、がんばってやりましょうと。それが反戦だったから反戦になるし、戦争だったら戦争になるし。

太田 本当の目的の部分のために行動を起こそうというよりは、組織を維持するために何か目的を設けてそこにみんなで行こうという風になっているのかなと思いますね。

鈴木 日本国家って、ピッチャーで言えば「な」とかだピッチャー」なんですよ。ストリートしか投げないダルビッシュみたいな感じだったらみんな簡単にわかるんですよ。だけど今の日本の首相もそうだし、国家としても債務も相当抱えているから、うまくして変化球を投げながらわからないように、わからないようにという感じでしょう。本物ってどういうものか知っていれば、ある程度それがいいものか悪いものかわかるんですよ。なんでもかんでも自分で考えないでやっているとどんどん判断能力がなくなっていくって、人間が人間でなくなってるんですよ。だから反戦以前の問題かもしれないですよ、もしかすると。

門脇 「人間が人間でなくなる」という表現を今鈴木さんがしましたけれど、自分個人ではいられない状況があるんですよ。ある組織に入っていたり、経済活動を行う上では自分の信条をある程度曲げないと生きていくこともままならなかったりとか。そういう中で、「がんばろう」や「戦争賛成」あるいは「反戦」にコミットされていく部分があるのかなと。

太田 個人個人が自立していれば、そんなにみんなで声をかけ合わなくてもできるんじゃないかなど。本当なら生き残れるんじゃないかと思う部分があつて、組織を残すことが目的になつてしまふ本来やるべきことを邪魔しているんじゃないかと思つて。例えば政治についても思うのが、現在の政治構造を維持することが目的になつていて、本来政治を通してやらなければならぬことがおろそかになつていふんじゃないのかなど。

鈴木 例えば政治経済について、経団連と日教組を叩き潰せばオッケーになると考えている人も多いですよね、これは極論なんですけど。極論だけど一理あるのかもしれないという感じがします。反戦あるいは戦争をしなくてはならないという考えにしないためには、国自体が健全でなければならぬと思ふんですよ。健全でないから結局戦争にいつてしまふんです。太田 道徳教育で命の大切さを教えるじゃないですか。映画などを見て命の大切さを知りました。でもそれっておかしいと思つていて、例えば今ここで私が鈴木さんを殺すかどうかというところで、命が大切だから殺さないわけじゃないと思ふんです。命が大切かどうかとは関係ないレベルで殺さないんだと思ふんですよね。何かずれてるんじゃないかと常々思つています。

戦争はいけぬことだからというレベルでは本当はないのではないかと思ふます。

門脇 実際、それほど自立して自分の考えをきちんと言つて戦争反対できるのかというと、僕についてはかなり不安ですね。この「定禅寺ジャーナル ウェブ版 デイバート編」でもコミュニティについて、あるいは祭りについて議論する中で、コミュニティとはこうあるべきだ、祭りはこうつくりたいとダメだと思ふんですけれど、その一方で反対のことをやつていふことが多々あります。例えば、どこに行つてもおなじものなんてつまらないと言ひながら、百均で買つて来たものでこどもたちにデコレートをさせたりしているわけです。

太田 それつて同じものを使つても場所によつて違ふものができることを目指しているんじゃないんですか。

門脇 まあ、そうなんです。例えば反戦もそういう感じで鈴木さんのように竹を割つたような信念を持つていふ人ばかりではないわけです。ちよつと転ぶとどつちにくかわからないような、ラグビーボールのような感じで生きていふように思ふんです。

鈴木 だいたいがそうだと思いますよ。自分はいふまでもいろいろなことがあり過ぎたので、そういう経験からこうした方がいいとすぐ結論を

出せるんだけど、必ずしもそれが正しいかというところはないし。ただし、少数派だから駄目かというところ、そうではないと思ひます。多数決が怖いのは、多数決が必ずしも正しいとは限らないことです。それをやつちやつたから太平洋戦争にいつちやつたでしよう。

門脇 その時に、僕自身はどつちに転ぶかわからないという非常に心もとない気持ちなわけですから、二者択一の問題に還元されてしまふからそうなるのかもしれないです。

『ビッグイシュー』の戦争特集の中ではつとつたのが、私はこれまで「平和」というのは戦争のない状態のことだと思つていたのですが、戦争によらない解決方法という意味で「平和」が使われているんです。例えばこの「平和省をつくる」という特集（77号）で取り上げられている平和省ですが、どんなことをする役所なのかというと、暴力によらない解決法を考える役所なんだそうです——ちなみにジョージ・オーウェルの『1984』にも同名の役所が出て来ますが、機能は全く反対です。また、「平和教育」というのは戦争はたいへんだよということとを教えるというだけでなく、暴力によらない解決方法を教えるプログラムなんだそうです。こういう「平和」なら、戦争か反戦かという二者択一でどつちに転ぶかわからない、という風

にはならないですね。

太田 それには賛成なんですけど、どこかで暴力をふるいたい欲求、戦争を起こしたい欲求もあるのかなと思っていて、じゃあそれを祭りとか——安全じゃない祭りですね——そういうところで発散させていくのがいいのかなと。

鈴木 祭りとカスポーツの国際試合ですね。代理戦争みたいな、そういうものは非常に大事なんじゃないかなと思います。ナシヨナリズムがあるなし、いい悪いは別です。あればあるにこしたことはないし、なければならぬにどうということはないと思います。あとは国民性もあるから。

門脇 もう一点、「戦争アニメ」というお習字をこどもに書いてもらいました。というのは、こどもの頃『マジンガーZ』など見ていましたが、アニメには戦争ものが多いですよ。

鈴木 多いです。『太陽の牙ダグラム』『機動戦士ガンダム』『伝説巨人イデオン』『新世紀エヴァンゲリオン』…。

門脇 美少女ものにも戦いの要素が見られますね。先日、出張先のホテルで朝何気なくテレビをつけていて知ったんですが、『プリキュア』も戦いものなんです。

鈴木 なぜかという、戦ったことがないからです。自分が反戦主義なのは、銃を撃つこと

がある、その怖さを知っているからなんです。知らないからできる部分ってあるじゃないですか。そういう考えだけじゃないかもしれないけれども、そういう人は多いんじゃないでしょうか。

太田 戦いの描写もしくは擬似的に怪我をするみたいなものが、本当の怪我じゃない部分の代償行為として必要なかなと思います。

門脇 今回の震災のように一瞬で多くの人が死んでしまうというたいへんな体験があると、命の大切さをより痛切に感じたりするように、戦争アニメというのは戦争がないからいっぱい生まれて来たことですね。ある極限状態に置かれるとある意味逆に爽快感があったり、ものを一生懸命考えたりする。そういうもののテーマが戦争、そしてもうひとつが恋愛なのかなと思います。スポーツものや戦いものも戦争ものひとつ——あるいはその逆に戦いものバリエーションが戦争やスポーツものと整理してもいいかもしれませんが——として、とりあえずその「仮想極限状態」みたいなものが、アニメや文学や映画などの重要なテーマになっている。逆に言うとならぬところない平凡な日常をテーマにしたものは非常にまれです。それは日常が平和なので極限状態が希少財のようになって

そうになっているわけですが、そういうものがな

いと何か風化してしまうという野生的な本能があつて、スポーツをやったり…。

太田 そういうのはあると思います。震災の後、市内なんてたいしたことはなかったんですが、その中でも最初の数日間食料が手に入らなくて、場合によっては飢える可能性もあるなという、ある種の危機的状況に陥ったんですね。ただその状況にいた時の方が今こうして平然としている時よりも生きている実感があつたんですね。

門脇 水が手に入らなかった時は水がとて貴重で、水を手に入れるためにいろんなことを考えましたよね。

太田 戦争がない平和というのとても重要だけれども、そうなってしまった時に危機を感じる部分をどこかに残しておかないといけないとまた乱れていくのかなと思います。

門脇 それが平和的解決につながっていくのかなと思います。平和的解決というのはある意味戦争に近いもの、裏表のようなものですよ。いろいろ交渉したり、暴力を回避するためにあの手この手を使ったり、そういうところに体験を持っていけると…。

太田 例えば交渉というのも、口でやるんだから易々しいものかというところでもなくて、本気の討議というのは終わった後にはそれなりの

充実感や達成感もあつたりするので、戦争によらない解決方法というのも徹底してやるんだつたら、戦争の代償行為というか、補完するものにはなるのかなと。

鈴木 戦争の代償行為なわけだから、その論争に勝たなきゃならないわけですよ。だけどその割に相手のことを全然わからないで行くでしょう。だからよくないですよ。話をする前にいろんなことを調べるのは、そうすることで自分が有利になるという、これは外交の基本みたいなところですよ。外務大臣とか外務省の役人とか見ると本当に能無しですもん。今までで外交上うまくいったことといたら、外務大臣が絡んでないんですよ。河野一郎さんがソ連に乗り込んで行って日ソ漁業交渉をまとめた時も、確か彼は農林水産大臣でした。英語しゃべれる外務大臣なんて今は当たり前なんですよ。世界で今一番人口が多いのは中国なんだから、あへの言葉はばっちり覚えておく感じにしないと。国籍は違ってもルーツは中国人というのがやたらいっぱいいるでしょう。あれも彼らの戦略ですから。戦争をする代わりに彼らはそういうことで中華街を世界中につくったりして、いやらしいことをいっぱいやってるんですよ。門脇 文化帝国主義という言葉もあります。英語を広めるとか、文化Ⅱフランスというブラン

ド戦略で国家の価値を上げるとか。

鈴木 ヒトラーが今生き残っていたら、ユダヤ人じゃなく中国人を虐殺すると思います。一番危ないですもん。

門脇 危ないというか勢いがあるというか…。鈴木 勢いがあり過ぎてるんですよ。いつパンクするかわからないというか。パンクした時にもしかすると、第三次なたらが起るかもしれない。自分の国のことを考えるだけでなく、近隣諸国がどういふことになるかということもある程度監視しながら；だから自分は反戦主義者ではありますけれど、国家間でもめぐごとを起すなということではないです。めぐごとって、もつとじゃんじゃん起さすべきだと思います。めぐごとを起こして話し合いをしないと解決もないです。奥山（仙台）市長もそうだし、村井（宮城県）知事もそうですが、もつと国とけんかしないと駄目だと思います。けんかして本当に分かり合える部分であると思います。だってあいさつだけしてペコペコしたって、何がわかりますか、そんなの。専門家でもなんでもないんだから。それから、「奥山市長の声が出ない」などぞろぞろ出て来ますよね。そんなこと言ってるんだつたらリコールすればいいんですよ。それもできないんでしょう、仙台市民なんて。なんにも起こさない。本当に頭に来んだつたら

名古屋市民みたいにリコールやりやあいんですよ。本当に奥山駄目、村井駄目と思ってるんだつたら。

門脇 駄目と思ってるんですかね。

鈴木 けつこう話は聞きますよ。だけどその時だけなんです。本当に駄目だというのなら、何をおいても叩き潰すでしょう。

門脇 不満を言っているだけで、別に代えたいわけじゃないんじゃないですか。

鈴木 それが宮城県民と仙台市民の正体なんです、はつきり言つて。

門脇 全くその通りだと思います。

鈴木 大塩平八郎みたいなことをやれとは言いませんけれど、本当に不満ならそれだけの行動をおこさなきゃ駄目ですよ。起こさずにくすぶっていくから、戦争が怖いと言っているんです。門脇 ここ仙台で震災と反戦について語る糸口が見えてきたようですね。ということでもそろそろ終了の時間になってまいりました。「震災と反戦」というこのテーマについては、3回にわたつてお送りしていきます。今日1回目は、いろいろなトピックスが出揃つて来たのかなと思います。そしてまた冒頭、鈴木さんと松田直樹さんとの知られざる交流が語られた印象深い回となりました。

鈴木 彼のことは正直亡くなったなんて実感も

ないし、そのうち「おっさん、買いに来た」と
かわわれそうな気がするんで、哀悼の意も何も
言いませんし、2年か3年くらいして実感が出
てくるのかと思います。

門脇 強烈な「生」を感じ、語る鈴木太さんと
ぬらりくらりな仙台市民である私・門脇篤、そ
して通りすがりの太田一彦さんがお送りする
「定禅寺ジャーナル ウェブ版 デイバート
編」、今日はこのへんでお別れです。また再来週
お会いしましょう、みなさんさようなら。